

# スペインにおける日本語教育の拡充と 日本研究の基礎固めのために

サラマンカ大学日・西文化センターと新学科創設をめぐる

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教  
稲賀繁美

サラマンカは、スペイン・カスティーリア地方の古い大学町として知られる。マドリッドから西北西に、長距離バスで二時間半ほど走ると、トルメス川のほとりの丘のうえに、12世紀に着工された大聖堂をはじめとする建築群が姿を現す。大学はレオン王国のアルフォンソ9世によって1218年に建立され、賢王アルフォンソ10世のもと、国際的水準に高められ、ローマ教皇アレハンドロ4世によって大学と公認。パリやボローニャ、オックスフォードと並んでヨーロッパ最古の大学のひとつに数えられる。現在の人口は十五万人程、そのうち学生数は二割に達する三万二千、職員・教員併せて三千弱。1988年ユネスコ世界文化遺産に登録されたうえ、2002年のヨーロッパ文化首都にも選ばれて、化粧直しも進んだ旧市街では、国際ジャズ・フェスティバルをはじめ、季節ごとに、さまざまな文化活動が催される。

スペイン特有の澄んだ青空と、カスティーリャの高原を流れる雲を背景に、黄褐色の砂岩でできた石造りの中世都市が、光と陰の鋭いコントラストをなして浮かび上がる。だが大聖堂が夕日に赤く染まり、やがて日没を迎えて夜間照明に照らされると、街並みはまた別の表情を見せ始める。この人口で、市内には五千軒のバルがあると云われ、夕刻ともなると、人々は着飾って一斉に街路に繰り出す。石畳の路地は、深夜まで老若男女の活気に溢れている。もっともこの活況は比較的最近の現象。ほんの十年前には学生数二万、教職員千六百を数える程度だったのだが、その後数年で、学生数は五割、教職員数は二倍と、大躍進を遂げた。日本でいえば、島根県の松江や三重県の津と同等の人口規模。だが、生活の充実感と比較にならない。どうして日本の地方大学都市では、名所・松江ですら、これだけの賑わいがないのだろうか。

そのサラマンカ旧市街に、1998年、大学の施設として、日・西センター(Centro Cultural Hispano-Japónes)が開設された。市庁舎を囲む、美しいマヨール広場から歩いて二分ほどのところに位置する、16世紀のサン・ホール宮が、スペイン進出日本企業を中心とする出資によって全面改装されたものだ。その展示室が皇后の名を冠しているところからも、皇室の特

別な思い入れが籠もった文化事業であることも知られる。1999年以來、ここに日本研究特別講義として、毎年、短期間の講師派遣がなされ、スペイン語に堪能な日本の第一人者が、交替で出講してきた(自由選択科目)。また2002年3月には、元スペイン大使、林屋栄吉氏のご尽力もあり、日本の出版社を中心とした援助で、1800冊におよぶ日本研究基礎文獻がセンター図書室に寄贈された。新聞記事でご承知の読者もあることだろう。矢島信夫氏をはじめとする現地職員の献身的な努力もあり、センターの運営はまず最初の軌道に乗ったといえよう。

さらに今年度のスペイン政府の閣議決定で、大学における東アジア研究学士号設立が間もなく認可される見通し、という。順調にゆけば来年度(2003年度秋学期)には、マドリッド自由大学の中国・日本、バルセロナ自由大学の中国コースと並び、サラマンカには日本研究を中心とする、東アジア研究コースが設立されることとなる。目下筆者は、日本研究学士号設立の準備として、1学期45時間、4-5単位分の授業を担当するかわたら、コース設立に助言を与える、という任務で、国際交流基金から現地に派遣されている。

実はここからが本題ののだが、新コース開設の成否は、おそらくいまから一年以内が山場だろう。学部とセンターの関係、(日本語学習を含む)学生の履修カリキュラム構想、合理的な出講時間割や教室確保のやり繰り、それ以前に、担当者コースの人事など、現在の段階では、すべて白紙に等しい。センターの運営に関しても、図書室運営や図書管理、センターの文化活動の拡充など、骨太な基本設計が不可欠な時期を迎えている。学内事情に踏み込むなら、センター創設に積極的にかかわった現学長の(規定改訂に伴う)三選がなくなるかどうかで、学内の風向きも大きく左右されるだろう。

何よりスペイン語で不自由なく学長や学部長、センター長とサシで議論ができ、高邁な視野にたつて新コースの将来構想を主導し、実行できる人材が必要とされている。一部の関係者には周知の事情とは思いますが、『図書新聞』購読者に、若手の教育・研究者で有意の方があれば、是非とも新コースの創設に加わって戴きたい。